

世界は 新しい表現を 待っている

立教大学文学部 文学科
文芸・思想専修

Rikkyo College of Arts Philosophy and Creative Writing

読んで、考えて、生きて、表現する 文芸・思想専修で学ぶことをめぐる対話

(教員インタビュー) 佐々木一也先生 × 林文孝先生

——文芸・思想専修はどんな場所ですか？

佐々木：

文芸・思想専修は、2006年に新たに立ち上げられた、比較的新しいコースです。そこには、それまで立教の文学部になかった哲学や芸術、それにキリスト教に限られない宗教一般を専門的に学べる場所をつくらうということと、文学を研究するだけでなく自ら作品をつくりたいという学生の要望に応えていこう、という文学部内で永年温められてきた理念が込められています。

林文孝：

既存の大学では、思想・哲学と文学研究・創作は別のカテゴリーとされていることが多い中で、文芸と思想が一緒になって1つの場所をつくっていかうというのは珍しいことかもしれません。けれども文学と思想が互いに開かれた状態にあることは、文学作品を書きたいと考えている方に

としては対象について思想的なアプローチが可能になるし、思想の研究をしたいと考えている方にとっては文学作品からさまざまな題材を得ることができるといったように、双方にとってとてもよい環境と言えるのではないでしょうか。

また、私の専門としている中国学の伝統では、「哲・史・文」といった区分けは存在しておらず、哲学・歴史・文学は総合的に研究するのが理想だという考え方があります。ですから私自身、哲学や文学という領域を横断していくのはとても自然なことだと思っています。

佐々木：

文芸・思想専修では、卒業時にいわゆる卒業論文ではなく、「卒業制作」として小説やエッセイ、戯曲などをつくる学生が多いことも特徴です。だから、漠然と調べ物をしてまとめるのではなく、表現したい、知りたいという具体的な関心や動機を持っている学生が多い。

動機やモチーフは感覚的なところから出発しながら、哲学・思想から学び、対象について論理的に思考する訓練を積んで、それを表現に生かしていく。単に書く技術を磨こう、というだけではないのです。今の時代に書かれるべきことを、あるいは自らの考えていることを的確に表現できる力を持った学生を養成したいと考えています。この力は人生に役立ちますよ。

——ご自身はどうして文芸や思想の道に進んだのですか？

林文孝：

私が中国に関心をもったきっかけは、子どもの頃に「漢字って綺麗な形だな」と思ったことでした。それから、たまたま父の書棚にあった漢詩の本に興味を持ち、李白や杜甫に出会いました。ですから入口は文学だったのです。一方で、漢字や漢詩が好きで子どもというのは当時から稀でもあり、なんとなく自分は周囲から浮いた存在だなという感覚がずっとありました(笑)。そうした実感から、社会秩序

Concept コトバと向き合う4年間

創作や批評実践をめざす「文芸」と、生きることや他者を理解することの意味を思索する「思想」は、表面的にはまったく異なる次元の営為のように見えます。

しかし実際には、文芸活動にあたって哲学的な思考の鍛錬は必要不可欠です。また、哲学的思索を深めていくにあたって、文学作品や映像といった表象作品を避けて通ることもできません。本来、文芸と思想は切っても切れない関係にあるのです。

そこで文芸・思想専修は、表面的には分かれた文芸と思想を、本来あるべき連続したひとつの学問領域と捉え直します。そして学生の一人ひとりが、文芸創作や思索活動の遂行者になるために必要な横断的学習と実践トレーニングを展開していきます。

Next Stage 卒業生の主な進路・就職先

メディア・マスコミ・広告・クリエイティブ関係	新潮社、大日本印刷、紀伊國屋書店、中央出版、日本出版販売、図書館流通センター、NHK、青森朝日放送、福島テレビ、リクルートメディアコミュニケーションズ、マイナビ、アフロ、東京ニュース通信社、ソニー・コンピュータエンタテインメント、バンダイビジュアル、日本芸術文化振興会など
商社・情報通信・小売関係	三菱商事、NTTコミュニケーションズ、ソフトバンクグループ、KNECTホールディングス、ロフト、丸井グループ、イオンリテール、ローソン、日本コープ共済生活協同組合連合会など
運輸・交通・不動産・製造関係	東日本旅客鉄道、JTB首都圏、エイチ・アイ・エス、日本郵便、佐川急便、LIXIL、住友不動産販売、みずほ信託不動産販売、三井不動産リアルティ、東急コミュニティー、パナソニック、ニチコン、帝国ホテルなど
銀行・損保・保険関係	三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行、りそなホールディングス、みずほフィナンシャルグループ、千葉銀行、あいおいニッセイ同和損害保険など
衣料・食品・外食関係	サンリオ、キューピー、クロスカンパニーなど
進学	立教大学大学院、東京藝術大学大学院、横浜国立大学大学院、一橋大学大学院など
その他	公務員、教員など
information	立教大学文学部文学科文芸・思想専修 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 池袋キャンパス
入試に関するお問い合わせ	立教大学入学センター TEL 03-3985-2660
website	www.bungei-shiso.com

が形成される際の排除や包摂のメカニズムに関心を持つようになり、そういうことを中国思想の中で研究しようと思ったのです。

佐々木：

私が高校生の頃は、学生運動が盛んな時代で、当時は社会の構造やシステムだけで人間というものをわかった気になるような議論が流行っていました。けれども私はそうした考え方が苦手で、もっと地に足の付いた人間的な世界観を持たないと、これからの時代を生き抜くことはできないと感じたのです。そこでハイデガーのような哲学者の本を手取るようになったのが、哲学の道に進むことになったきっかけです。

哲学・思想というと、浮き世離れた言葉を使って議論しているようなイメージもありますが、それは本来の姿ではありません。日々の私たちの買い物からグローバル経済に至るまでの経済活動や社会制度にも、背後には必ずそれを動かしている何らかの考えがありますよね。自分の目の前に差し出された選択肢はどのような考えでつくられているのか、なぜ、社会でこんなことが起きているのか——表面的に訴えかけてくるものに受け身で反応するのではなく、物事の本質を考えながら行動しようとする時に、大きな力になってくれるのが哲学・思想なのです。そこには、100年、1000年というスパンで蓄積されてきた人類の思考の蓄積があるのですから、ここから学ばないという手はないのです。

——文芸・思想を学ぶことは、社会でどんな役に立つのでしょうか？

佐々木：

日本の社会は安定成長期を過ぎ、退縮期に入ろうとしています。成長期には同じものを大量に供給するために他の人と同じことをやるのが求められてきましたが、退縮期はその逆で、他の人と同じことをやっても評価はされません。さまざまな場面で軋轢が生じることも多い退縮期の社会で求められるのは、自律的にものごとの本質を見極め、新しい事態に柔軟に対処できるような個性的でかつ汎用性のある見識です。文芸・思想専修ではそれを鍛えます。

アメリカの大学では学部の4年間はリベラルアーツといって広い知識と見識を身に付けた後、大学院で各専門分野に進みます。日本の大学でこのリベラルアーツに相当するのは文学部です。立教の文芸・思想専修はその中でも最も先端的にリベラルアーツの理念を体現しているコースです。だからたとえば、ここを卒業した後にロースクールやMBAのコースに通うということがあっていいでしょう。



林文孝 Fumitaka Hayashi
専門は中国近世(宋・明・清)哲学思想、歴史論。主な研究テーマは朱子学や陽明学、明末清初の経世致用の学など、近世儒教思想を中心とする中国哲学。政治・倫理・歴史といったテーマにかかわる中国哲学のテクニカルな考察を掘り起こし分析している。

林文孝：

佐々木先生はヨーロッパ、私は中国が専門ですが、文芸・思想専修には、南米からクレオール文化、そして現代日本のサブカルチャーまで、多様な言語・文化を背景として、研究はもちろん創作や批評の第一線で活躍する教員が揃っていますから、なかなか他所では触れられないものと出会う機会に満ちています。自分も、学生時代には理解できなくて投げ出したような本を数十年経ってから読んで納得するということが結構ありますが、学生時代に播かれた種は、必ず後の人生で芽を出してきますから、ぜひこの場でそういう種をたくさん播いて欲しいですね。

佐々木：

まったく同感で、私は学生に「読んで、考えて、生きて、表現する」ことをモットーにして欲しいということをいつも伝えています。とにかくいろんなものを読み、たくさんの表現に触れる。そしてそれがどういう考えでつくられたのかを、教員や他の学生とも議論しながら、考える。そして、学内だけでなくアルバイトやサークルの場でも、読み、考えたことを実践して、生きてみる。そうした経験の積み重ねを卒業論文・制作で表現として結実させて欲しい。文芸・思想専修で養われる分析力、思考力、実践力、表現力はどこに出たって通用すると思います。

文芸・思想専修では、1年次の入門演習から3~4年次の専門演習まで、多彩な演習科目を設置しています。演習では、様々な専門分野を持つ教員のもと、多様な文学や思想を少人数のゼミナール形式で精読します。講義科目では、創作や批評の一端で活躍する多彩な講師のもと、ものの見方や考え、関心の幅を大きく広げていきます。ここにあげるのは、2015年度に行われる授業のテーマ例です。

福嶋亮大 | 演習
90年代以降の社会・映像・批評

大徳哲雄 | 文学講義
マンガ/アニメ表現論
日本アニメの歴史的な展開

平田俊子 | 文学講義
詩創作論

創る、

千葉一幹 | 文学講義
小説創作論 恋愛小説の作法

平田俊子 | 演習
エッセイを読む。エッセイを書く。

郷雅之 | 演習
雑誌をつくる

〈時代の鏡〉である「雑誌」というメディア。実際に1冊の雑誌を受講者全員でつくりあげることを通じて、企画/取材/執筆/編集/レイアウト/校正/製作/刊行という各作業を経験し、出版/編集をめぐる基礎的理解と、実践的な技能を身につける。

片上平二郎 | 哲学講義
現代思想の諸問題
「現代性」と「近代性」の思想的課題

福嶋亮大 | 文学講義
マンガ/アニメ表現論
大衆文化(サブカルチャー)への理論的視座

井川耕一郎 | 演習
劇映画の面白さとは何か

青木純一 | 演習
三島由紀夫「金閣寺」精読

青木純一 | 入門演習
日本近代文学を読む

阿部賢一 | 文学講義
世界文学論 「小さな声」に耳を傾ける

林文孝 | 演習
調読論

林文孝 | 入門演習
テキストの批評的読解

青木純一 | 演習
パフォーマンスへの誘い

文学作品の読解と朗読を通じて、普段私たちが意識しない「表現としての言葉」の持つ特質を頭と体の両面から感得する。また学期末までに、音楽家の河崎純氏の協力を仰ぎながら、音楽を含めた朗読パフォーマンス作品を履修者全員で完成させる。

佐々木一也 | 演習
物事の本質を考える練習

平田俊子 | 文学講義
「小説」を読む、書く、批評する

林芙美子、川端康成、坂口安吾など、明治以降の日本の小説を中心に、流れに沿って読んでいく。またみずからも短めの小説を書き、小説を読む力、書く力、批評する力を養っていく。

林みどり | 演習
モノ表象から文学作品を読んでみる

小野正嗣 | 文学講義
文芸評論 「家族小説」を読む

福嶋亮大 | 入門演習
批評とは何か、日本とは何か

近現代日本の批評家たちにとって「日本」とは何かを考えることは、きわめて重要な課題であった。日本をテーマとした短めの評論文(古典論からオタク論まで)を読み解きながら、批評とは何か、そして日本とは何かを考える。

小野正嗣 | 入門演習
アフリカはどのように表象されてきたか

19世紀以降書かれた小説のなかで、アフリカはどのように主題化され、表象されてきたかを考察する。作品を丹念に読解するだけでなく、作品の歴史的・文化的背景についても調査することで、多角的な作品分析をおこなう。

郷雅之 | 文学講義
広告文芸論
堤清二(辻井喬)と糸井重里

三吉美加 | 文学講義
文化翻訳論 アメリカにおける
黒人・ラティノ・カリブ系の文化

福嶋亮大 | 演習
ポストモダン日本の批評を読む

読む、

林みどり | 入門演習
近現代の様々な短編作品に触れる

大久保紀子 | 演習
北村透谷を読む

林みどり | 演習
宮本常一の世界を読む

被差別民や漂泊民に着目した日本民俗学の鬼才、宮本常一。そして、既存の日本像を覆した中世史家・網野善彦。宮本の代表作である『忘れられた日本人』を、網野によるその解説本を導き手として読解していく。

佐藤香織 | 現代倫理
「悪」と「暴力」について考える

本郷朝香 | 哲学概論
主体性とは何か

青木純一 | 文学講義
文明批評論
ハイデッガー「技術への問い」を通じて

橋本麻里 | 哲学講義
芸術論 日本美術「と」歴史

大熊玄 | 哲学講義
現代思想の諸問題 鈴木大拙と「禅」

林文孝 | 哲学講義
東洋哲学
東洋倫理想の可能性と限界

東洋哲学は、西洋とは異なるどのような問いに導かれていたのか。そこにはどのような新たな可能性を読み取れるのか。20世紀初頭に中国人の手で作られた倫理教科書を読解しながら、東洋倫理想の可能性と限界を再考する。

阿部賢一 | 演習
幻想文学への誘い

理性では捉えることのできない世界を描く作家や詩人たちがいる。磯澤龍彦、山尾悠子、フランツ・カフカ、ミハル・アイヴァスら「幻想文学」と呼ばれる作品を丁寧に読み、現実世界を補完する世界としての「幻想文学」の世界を考察する。

向後剛 | 演習
近現代日本の思想と文化

松本秀士 | 演習
中国文化の特質と中国語のメッセージ性

佐々木一也 | 演習
哲学する力をつける

西洋哲学の概念を身につけ、本質的思考を試みる。哲学史の概要を学習し、古典のテキスト(今年度は、プラトン『国家』)を味読し、現代の社会生活に潜む多様な哲学的課題(未来の意味、殺人禁止理由など)を考察する。

片上平二郎 | 演習
「映画」と「映像」の思想

林みどり | 演習
都市論の方法と実践

考える。

大久保紀子 | 哲学講義
死生論 日本の伝統的な死生観

虎井まさ術 | 文学講義—ジェンダー論
生活の細部に宿るジェンダーを考える

講師自身、女から男に性転換し、戸籍上も男になって、肉体だけでなくジェンダーも移行する体験を経てきた。女から男に変わったとき社会の眼はどう変わったか。男の世界と女の世界はどう違い、どう同じなのかを考えていく。

コトバに

ならないものを、

コトバで耕していく

文芸・思想専修の中で「西洋思想」の私が担当するのは主に「読む」「考える」力の育成です。一見難しい哲学の概念は、生活を客観的かつ反省的に見つめるために不可欠な道具で、慣れれば使いこなせるようになります。その道具を使ってこそ生活経験の次元から本質の次元へと自分の思考を深めることができます。具体的な生活世界とそこでの感覚から出発して、自分の力でそれを踏み分け、自分の思想を創りましょう。私の授業はそのための手がかりと訓練の場を提供します。

我々には何かを「表現したい」という欲望があるようです。音楽や絵画や映像やダンスなど、その手段はさまざまありますが、とりわけ「ことば」によって、自分のなかに湧き上がってくるもの「私たち」を与えたいと思っている人も多くは必ずです。そういうみなさんといっしょに、みずから「創造する」こと「書く」という視点から、「ことば」による作品について考察します。「書く」「ことば」「読む」とは不可分の営みですから、小説や詩や批評など、世界のさまざまな文学的作品を、どしどし、そしていていねいに読んでいきましょう。

チェコの作家ミハル・アイヴァスは、「もうひとつの街」という小説で、こう述べています。「本当の出会いとは怪物、この出会いは」。「ことば」だ、そう、本とあれ、絵とあれ、映画とあれ、何であれ、既存の世界観を破壊してくれるほどの刺激と衝撃がなければ、それは本物の出会いとは言えないはず。みんなと一緒に、そういった「怪物」に会いたいと思っています。

私は講義や演習で、「読む」ということに主眼を置いています。講義では哲学のテキストの読解を、1、2年次の演習では文学のテキストの読解と議論を中心に授業を進めています。例外的に、3年次の演習では朗読を中心としたパフォーマンス作品の創作を行います。これも身体性の読みと書きの近道は「良く読む」「良く書く」ことであるという考えから、このようなプログラムで授業を行っています。



青木純一
近現代日本文学批評、近代西欧哲学
著書に『三島由紀夫 小説家としての問題』(原書房)、主な論文に『酒の日本文芸史・試論』、『近代を映す言葉の探求者(中島健論)』、『法の外(小林多喜二論)』など。



阿部賢一 2016年3月退職予定
中東欧の文学と美術、表象文化論、比較文学
著書に『イジュー・コラージュの詩学』(成文社)など、訳書に『エウロペアノ 二〇世紀史概説』(P.Oウジエドニーク著、共訳、白水社、第1回日本翻訳大賞)など。



小野正嗣
創作論、批評、現代フランス語圏文学、比較文学
著書に『九年前の折り』(講談社、第152回芥川賞)など、訳書に『E.グリッサン『多様なものの詩学序説』(以文社)など。2013年、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞。



佐々木一也
哲学(西洋思想)、
現代思想論:ハイデッガー及び解釈学の文明批判論
著書に『講座 近・現代ドイツ哲学II』(理想社、共著)、『現象学と倫理学』(慶応通信、共著)など、訳書に『ガダマーの世界』(G.ウォーナー著、紀伊國屋書店)など。

文芸・思想専修
専任教員からの
メッセージ

私は中国思想の研究者で詩も小説も書きませんが、文芸・思想専修の一員になって以来、文芸と思想とのつながりを感じるようになりました。この専修で勉強するのでなく、表現する内容を吟味し洞察する力を身につけてほしい。異文化の思想との対話をとおして自己を相対化することもまた、その一助になるはず。

ふと気がつくと、本屋やDVDショップでもいつも同じ棚の前に立っていたりしませんか? 新しい文学作品や映画にチャレンジしてみたことも、どれを選んでいいかわからない。日々、情報の怒濤に翻弄されるうちに、いつか自分は何を讀みたいのか、どんな作品に触れたいのか、それ自体わからなくなっていたりしませんか? 情報や出版物の荒波を軽やかにサーフするための自分だけのオリジナルな指針を手に入れたい。文学賞や店先のポップに頼るのではない、独自の選択眼と分析力を身につけたい。もしそう願うなら、文芸・思想専修は、そんなあなたのための学びの場です。

詩や小説を書きたいという学生はたくさんいますが、そういう人たちの読書量はそれほど多くないようです。書く力を養うためには先行する作品を数多く読むことは欠かせません。なぜ自分は書きたいのか、書くとはどういうことか。そういう疑問を常に抱えながらうめば、ということなく読み続け、書き続けていけば面白い場所に到達できるかもしれません。

文化・芸術・思想との出会いは、ときに計算を超えた「事件」になり得ます。狭小なアイデンティティは一度投げ捨てて、事件の匂いを嗅ぎつけること。そのために大学を利用すること。一理論と道具箱のようなもの、という哲学とは、道具箱のようなもの、です。大学に潜む道具箱を使い、たとえ貧しくとも新鮮な風景に身をさらすべく、ともに学んでいきましょう。



林文孝
中国近世(宋・明・清) 哲学思想、歴史論
著書に『「封建」再考—東アジア社会体制論の深層—』(思文閣出版、共著)、『比較史のアジア 所有・契約・市場・公正』(東京大学出版会、共著)、など。



林みどり
ラテンアメリカ思想文化、ポストコロニアル批評
著書に『接触と領有』(未來社)、『歴史を問う—歴史が書きかえられる時』第5巻(岩波書店、共著)、『芸術は何を超えていくのか?』(集英堂、共著)など。



平田俊子
文芸創作論:詩と小説の実作のために
詩集に『詩七日』(思潮社、第12回萩原朔太郎賞)など、小説に『二人乗り』(講談社、第27回野間文芸新人賞)、エッセイ集に『スバらしきパス』(幻戯房)など。



福嶋亮大
文芸評論、表象文化論、中国文学
著書に『神話が考える—ネットワーク社会の文化論』(青土社)、『復興文化論—日本の創造の系譜』(青土社、第36回サントリー学芸賞「思想・歴史部門」)。